

セミナー通信

V o 1 . 2 7 5

西村セミナールーム

主宰 西村 恵子

2017年度卒塾生 パートテスト

春が来ました。今年のサクラも見事に咲きました。2017年度卒塾生は、無事全員第一志望校に合格することができました。彼らは皆、中1の1学期から一緒です。12人で3年間共に学び、そして、12人そろって合格しました。それぞれにこの3年間の歴史があります。ドラマがあります。そんな一人一人の“サクラ咲くまで”を、このセミナー通信で今年は順に紹介させていただこうと思っています。まずトップバッターは高蔵寺高校に合格した女の子です。

合格発表のその日。11時も過ぎた頃、その子は入り口ドアを開けて入って来た。私は電話を受けていた最中で、電話の向こうからのうれしい合格の知らせを聞いて喜びつつ、入り口に立っているその子に視線を向けた。心の中は心配ではち切れそうだった。するとその子は私が電話中であることに気づき、声には出さず笑顔とともに手でオッケーサインを出した。やった！合格だ！よかった。本当によかった。喜びと安堵から私の目からは涙があふれた。

この受験には内申が足りなかった。3年の2学期の時点で必要内申点に3点ほど足りない……。当日点で逆転するしかない状況の中、卒業式の前日にもらってきた通知表は、まさかの“1点下がったもの”だった。内申4点不足……。青くなる本人。「当日、取るしかないね。」私も腹をくくり、そんな言葉を絞り出すのが精一杯だった。

中1のころ彼女は、パートテストにおいて不合格となってしまうことが多々あった。そして、夏。あまりにも悪い結果の連続に、私は真剣に取り組んでもらうことを願って心を鬼にし、「次に不合格になったなら退塾してもらおうよ。」と言い渡した。彼女の目の色が変わったのはそこからだった。パートは一切失敗しなくなった。きっちり合格点を取り続ける。宿題忘れや間違い直し忘れがあつたとしても、パートテスト勉強だけは何があつてもやり続けた。絶対に“落とすてはいけない”テスト。一体どれだけのプレッシャーがあつたことだろう。どんなに疲れていても、どんなに眠くとも、合格できるよう練習していかなければならないのだ。

受験当日、足りない内申点をカバーするため高い当日点を取ってこななければならないという大変なプレッシャーに押しつぶされそうになりながらも、しかし、彼女は力を出し切りふんばりきった。内申不足を補うだけの実力もこの3年間で確かに身に付けていた。数学で学年1位をとったこともある。ただ、それをプレッシャーのもと、しっかり発揮しきれるかが勝負なのだ。学校の先生の「その内申では落ちるかもしれないけど頑張れ。」—そんな不安げな言葉を跳ね返すほどに、彼女の根性は3年間で強く培われ、最後の最後彼女自身を支えてくれたのだ。